

うた びと
「昭和の歌人たち」～第32回 山口洋子～
(2月1日 新宿文化センター)

戦後の復興や高度経渃成長を遂げた「昭和」。この激動の時代に、日本の音楽史に大きな足跡を残した作家に焦点をあて、時代背景とともにその作品と人物像を紹介するシリーズ。

今回取り上げたのは、平尾昌晃氏とのコンビで数多くのヒット曲を生み出し、小説家としても活躍した作詞家・山口洋子氏。女心を斬新な切り口で描いた歌謡曲の数々を紹介した。

今回のゲストは、山口氏とはゴールデンコンビと呼ばれ、多くのヒット曲を生み出した作曲家の平尾昌晃さん。

平尾さんは、山口氏の詞について、「それまでの歌謡曲とは違い、詞がリズムに乗りやすく絵が浮かんできた。何気ない会話からキーワードを見つけ、作詞に繋げていた」と語るとともに、「普段は気さくで面倒見のよい方だった。クラブを経営していたが、お酒は全く飲めなかった。夜更かしも苦手で、朝早く起きて夜をテーマにした詞を書いていた」と山口氏の人柄を振り返り、自らが作曲した『あなたの灯』を歌唱した。

コンサートの冒頭で五木ひろしさんが歌った『よこはま・たそがれ』は、名詞が連なる歌詞が特徴的で、タバコ等の小道具から世界が広がっていく山口氏の代表作の一つ。五木さんは、日本レコード大賞歌唱賞など数多くの賞を受賞し、本人にとっても原点となったこの曲について「初めて聴いた時、絶対にヒットすると思い、どうしても歌わせてほしいとお願いした」と思い出を語った。

昭和の大スター・石原裕次郎さんは、山口氏のクラブの常連客だったこともあり、山口氏は石原さんの歌う曲を数多く手がけている。石原さんの遺作『北の旅人』は、本人がハワイから直接作詞を依頼したもの。取材で沖縄



ゲストの平尾昌晃さん(右)



山口洋子氏略歴

1937(昭和12)年、愛知県名古屋市生まれ。17歳の時に東映ニューフェイスに合格。19歳で銀座にクラブ「姫」を開店し、各界の著名人が訪れる有名店へと育てあげる。その後、作詞家としての活動を始め、1967(昭和42)年にJASRACに入会。数々のヒット曲を世に送り出し、1973(昭和48)年に『夜空』で日本レコード大賞を受賞。



小説家としては、1984(昭和59)年に「プライベート・ライブ」で吉川英治文学新人賞、1985(昭和60)年に「演歌の虫」「老梅」で第93回直木賞を受賞。2014(平成26)年没。

にいた山口氏は必死に北海道をイメージして書き上げたという。コンサートでは、野村将希さんが『北の旅人』を、北川大介さんが『ブランデーグラス』を、山川豊さんが『想い出はアカシア』を披露した。

このほか、女心を綴った作品として、森山愛子さんが『私は京都へ帰ります』を、由紀さおりさんが『ひとりぼっち』をそれぞれ情感豊かに歌い上げた。

コンサートの締めくくりは、誰にでもある故郷の古き良き風景を描いた名曲『ふるさと』。ステージ上に勢ぞろいした出演者と満席の聴衆が一体となって合唱した。



五木ひろしさん



中条きよしさん



野村将希さん



八代亜紀さん



山川豊さん



北川大介さん



森山愛子さん